目次
西ドイツの仏教研究—点描— 1
昭和62年度「一般研究」選考結果 4
学寮草創関係資料調査報告 5
『校本　高倉学寮諸制條類纂』編集記 7
ジョン・ロス・カーター博士による仏教特別セミナーの開催について 9
海外仏教研究所蔵雑誌目録 10
ロンドン・インド省図書館の一室から 13
San Tendai Godai san ki 15

大谷大学真宗総合研究所
研究所報
No. 16　1987. 3. 30.

『海外仏教研究』　〈指定研究〉

西ドイツの仏教研究—点描—

チーフ・研究員
本学教授　長崎法潤

はじめに

西ドイツのハンブルグ市で昨年（1986年）8月下旬、第32回国際アジア・北アフリカ研究会議（ICANAS）という名称の国際学会が開催された。古い伝統のある大きな学会であり、今回は15部会と15パネルにおいて研究発表がなされた。そのうち「仏教研究」を主とする第2部会では、著名な仏教学者シュミットハウゼン（Lambert Schmithausen）教授（ハンブルグ大学）がそのコンヴィーナー（招集者）をつとめ、世界各国の仏教学者による多彩な研究発表が行なわれた。筆者は第2部会で研究発表をするとともに、数多くの学者と交流をもつことができた。

研究会議の終了後、ゲッチンゲン大学、ボン大学、ウィーン大学など仏教研究のさかんな諸大学を訪ね、文献研究を主とする仏教研究にたずさわる多くの学者に会う機会を得た。以下は、研究会議についての報告と西ドイツを中心とする仏教研究について、目に映った断片的な印象を記したものである。

（1）

第32回国際アジア・北アフリカ研究会議（XXXII International Congress for Asian and North African Studies：略称　ICANAS）は、1986年8月25日から8月30日まで、西ドイツのハンブルグ市で開かれた。東洋学研究の国際学会としては最も古い歴史をもつこの研究会議は、以前は東洋学者会議と呼ばれ、その第1回は1873年にパリで開かれ、113年間にわたり、東洋学研究における学術的成果を積み重ねてきている。前回の第31回国際アジア・北アフリカ人文科学会議（CISHAAN）は、1983年8月31日から9月7日まで、東京と京都で開かれている。

さて、ハンブルグの研究会議が始まる前日8月24日の夕刻、懇親会が開かれた。ハンブルグ国際会議場に設けられた研究会議受付で登録をすませて二階の懇親会場に入ると、インド、アメリカ、英国、ドイツの知合いの学者が多数出席している。日本からの参加者も多い。お互いに挨拶をかわし、再会を喜びあった。ハンブルグの夜空は9時すぎまで明るく、たけなわの宴はいつまでも続いた。

開会式は8月25日午前10時より、国際会議場ホールで行なわれ、はじめにハンブルグ交響楽団のメンバーによるバッハのチェンバロ協奏曲第一番第一楽章（アレグロ）（BWV　1052）が演奏された。精神的に深遠で精緻な曲は、美しい調和をもってホールをみたし、ヨーロッパの深い伝統がしみじみと感じられた。

まず、第31回国際アジア・北アフリカ人文科学会議会長山本達郎博士の挨拶、つづいて第32回国際アジア・北アフリカ研究会議会長レダローゼ（Lothar Ledderose）博士の歓迎の挨拶があっ

た。東洋学者会議はドイツにおいて4回開かれることになる。そのうちハンブルグでは1902年に第13回の会議が開かれ、そして今回がその2回目になる。第13回の会議は、100名ほどの参加者で、文献学、歴史学的な研究発表が主であったが、今日は、あらゆる分野の学問、現代に関する学問も発表に含まれている。それにもかかわらず、文献学と歴史学が研究の中心である、とロ博士は述べられ、印象的であった。なお、インド古典文法学、インド哲学の研究者として著名なヴェツラー（Albrecht Wezler）教授（ハンブルグ大学）が今回会議の書記長をつとめた。教授の報告によると、参加国は46ヶ国、参加者は793名におよぶとのことである。

開会式につづき、その日の午后から5日間にわたり、国際会議場、ハンブルグ大学本館、同大学「フィロゾーフェン・トゥルム」の三ヶ所において、15部会、15パネルに分かれて研究発表、討論がなされた。部会は次のような学問分野、あるいは地域分野によって分けられている。

第1部会　「美術と考古学」
第2部会　「仏教研究」
第3部会　「中央・内陸アジア」
　小部会A　「アルタイ・蒙古研究」
　小部会B＋D　「イラン・トハラ語研究」
　小部会C　「チベット学」
第4部会　「オリエントのキリスト教」
第5部会　「東アジア」
　小部会A　「中国研究」
　小部会B　「日本研究」
第6部会　「イラン学」
第7部会　「イスラム研究」
第8部会　「近東・北アフリカ」
第9部会　「セム学と古代近東」
第10部会　「東南アジア」
第11部会　「東南アジアと太平洋」
第12部会　「アジアの伝統医学」
第13部会　「トルコ学」
第14部会　「図書館学」
第15部会　「パーソナル・コンピューターと東洋学」

パネルでは、（パネル1）「アジアにおけるキリスト教」、（パネル2）「遊牧民の政治構造―部族の問題―」……（パネル6）「アジアの仏教伝統における自我の概念」、（パネル7）「アジアにおける自害」……（パネル9）「アジアにおける宗教伝記」……（パネル12）「インド認識論：理由根拠としてのヘートゥ」、（パネル13）「南アジア刻文学における近年の発見」……（パネル15）「サカ族の世界」など興味深いテーマのもとで研究発表、討論がなされた。予定されていた（パネル5）「東南アジアの有力な指導者たち」は取消されて第11部会に合流し、新たに（パネル16）「中世の写本」が追加された。

仏教研究に関する発表は第2部会にまとめられていたが、チベット仏教関係の発表は、ルエグ（David Seyfort Ruegg）教授（ハンブルグ大学）がコンヴィーナーをつとめる第3部会の小部会C「チベット学」に含まれ、御牧克己博士（京都大学）、ルエグ教授、ウェイマン（Alex Wayman）教授（コロンビア大学）などの研究発表がなされた。仏教論理学に関する発表は、マティラル（Bimal Krishna Matilal）教授（オックスフォード大学）がコンヴィーナーをつとめるインド認識論のパネル12にまとめられていた。そこではシュタインケルナー（Ernst Steinkellner）教授（ウィーン大学）の発表が予定されていたが、病気で参加できず取消された。さらにパネル6、9などにもパネルのテーマにもとづく仏教関係の発表がなされている。インド学関係の発表は第10部会にまとめられ、ヴェーダ、ジャイナ教、ヒンズー教などに関する多数の研究発表がなされた。浅野玄誠君（当時大谷大学特別研修員）は、ジャイナ教学僧ハリバドラ・スーリのヨーガ観について発表している。

（2）

シュミットハウゼン教授がコンヴィーナーをつとめた第2部会「仏教研究」には75名の研究発表が予定され、発表の取消もあったけれども、たいへん盛会な部会であった。部会は小部会AとBの二ヶ所で行なわれた。小部会Aには、法華経、中国仏教、中観、唯識などの教義に関する研究発表、小部会Bには、東南アジア、ネパールの仏教、インド仏教史、仏教文学、仏教芸術に関する研究発表がそれぞれまとめられていた。

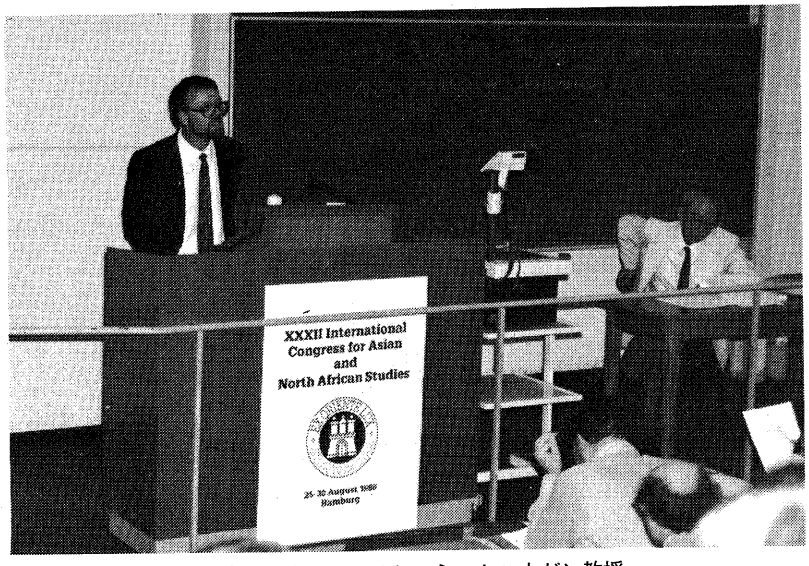
この部会で研究発表をした日本人学者は12名ほどである。高崎直道教授は、実叉難陀訳『起信論』を、真諦訳との比較において、そのインド的性格を吟味する研究発表をして注目を集めた。その他、江島恵教博士、丸山孝雄教授、久保継成博士、湯山明博士、中谷英明博士の研究発表は、それぞれ力のこもったものであった。筆者は、『瑜伽師地論』における直接知覚についての研究発表を行なうと

ともに、8月28日午後の小部会Aで司会をつとめた。

インドから多数の参加者があったが、その一部の発表をあげれば、ティワリ（Mahesh Tiwary）教授（デリー大学）は、原始仏教に伝える死心（cuti-citta）をもとにして死に至る過程について論じ、ミッタル（Kewal Krishan Mittal）教授（デリー大学）は、『中論』の Tathatā, Śūnyatā, Nirvāṇa, Saṃsāra の意味について考察した。デリー大学の哲学科主任教授バット（S. R. Bhatt）教授は、「因の三相」について発表し、パネル12ではインド論理学における hetu について論じた。インド人学者のなかには、パーリ語、サンスクリット文献に対する知識は豊かであるが、漢訳仏典やチベット訳文献を無視する傾向が強く、仏教研究の成果が充分に得られていない発表も少なくなかった。

ヨーロッパの仏教研究では、ドイツの学者の活躍に目ざましいものがあり、研究発表にも注目すべきものが多い。インド仏教文学の研究で知られるハーン（Michael Hahn）教授（ボン大学）は、『アヴァダーナシャタカ』の所属部派に関する問題をとりあげ、引用文献の点から、説一切有部ではなく、根本説一切有部であることを解明しようとした。ヒニューバー（Oskar von Hinüber）教授（フライブルグ大学）は、北パキスタンの仏教遺跡 Thalpan で最近発見された碑文について興味深い発表をした。フェッター（Tilmann Vetter）教授（ライデン大学）は、『般若心経』における空をとりあげ、色即是空について哲学的にほりさげた発表を行なった。ディーツ（Siglinde Dietz）博士（ゲッチンゲン大学）は、『世間施設論』の梵文断片にパータリプトラの王統リストが記されていることを報告した。また、エトケ（Claus Oetke）教授は三世実有説に関するブッダデーヴァ説の解釈について、リントナー（Christian Lindtner）博士（コペンハーゲン大学）は、竜樹の論書に見られるvijñāna, jñā- を語源にする語（prajñā, parijñāna, jñāna, abhijñā）を分析し、竜樹の認識論的立場を明らかにするとともに、唯識の展開との関連性を見出そうとした。

仏教研究においてすぐれた論稿を数多く発表しているシュミットハウゼン教授の研究発表は最終日の最後であり、なかなかの人気であった。教授は、アーラヤ識の起源の問題をとりあげ、『瑜伽師地論』の記述をもとにして、滅盡定に入った者が、生命を保つ一種の原理としてアーラヤ識が導入されるに至ったという新説を提示した。論の進め方において仏教に対する深い理解と洞察が感じられ、第2部会の最後を飾る内容の発表であった。最後に、司会者をつとめた高崎直道教授が、第2部会「仏教研究」のコンヴィーナーをつとめたシュミットハウゼン教授に謝意を述べ、大きな拍手をもって第2部会は閉会になった。〔未完〕



研究発表されているシュミットハウゼン教授

大谷大学真宗総合研究所

昭和62年度「一般研究」選考結果

昭和62年度の「一般研究」は、研究所委員会で数度にわたる慎重な審議の末、共同研究１件、個人研究５件が決定された。６件ともに新規の採用である。従来に比して個人研究の件数が多いのが今年度の特徴である。また今回初めて自然科学系統の研究が採用された。それぞれの研究が綿密な研究計画を立てており、着実な研究によって所期の目的の達成が期待されている。なお、各研究の研究目的については、『所報』の次号（第17号）で紹介する予定である。

昭和62年度一般研究

(A)共同研究

研究代表者	研究テーマ及び研究組織	補助額
幡谷　明　教　授	「『教行信証』の基礎的研究」 研究員　幡谷明、細川行信（以上教授・真宗学） 研究補助員　金信昌樹、村上宗博（以上博士課程）	100万円

(B)個人研究

研究者	研究テーマ及び研究協力者	補助額
白館戒雲　専任講師	「『歎異抄』のチベット語訳のための研究」 協力者　三明智彰（専任講師・真宗学）	50万円
千葉芳夫　専任講師	「知識社会学の成立に関する研究」	50万円
石橋義秀　助教授	「日本僧伝文学の研究」	50万円
佐賀枝夏文　専任講師	「近代大谷派教団社会事業の研究」	50万円
西田潤一　助教授	「近畿における重力探査データのコンパイル」	50万円

◇西蔵文献研究班研究組織一部変更について◇

本研究所客員研究員アレクサンダー・ノートン氏が、客員研究員としての期限が切れたのにともなって、研究所委員会の議を経て、西蔵文献研究班に研究補助員として加えられることとなった。(昭和61年10月より)。氏の英語力はもとより西蔵語の力は同班の作業に大きな貢献をなすものと期待されている。

なお同10月より新たにウィリアム・ウォルドロン氏が当研究所の客員研究員として迎えられた。米国ウィスコンシン大学での研究をさらにおし進め、学位論文完成にむけて研鑽中である。

『真宗学事研究』研究会報告
日時：昭和61年9月25日(木)
場所：研究所会議室

〈指定研究〉

学寮草創関係資料調査報告

研究員
専任講師　木場明志
(国史学)

指定研究「真宗学事研究」では、昭和60年3月に学寮草創関係資料の調査を目的として、九州大学、太宰府観世音寺、唐津安楽寺の三ヶ所を中心に研究員木場明志・草野顕之、研究補助員三本昌之の3名が派遣されて調査にあたった。以下はそれにもとづく報告の要旨である。

1．学寮草創年次について

学寮は、江戸期の寛文5年（1665）に東本願寺内の東坊に創設され、のち延宝6年（1678）に枳殻邸内に独立の講堂が建てられて形態を整えた、とされる。草創を「寛文5年」と明示するのは、大正11年版の『大谷大学要覧』が嚆矢であり、それ以前の沿革誌が「寛文年中」としていたのと一線を画している。これは、同年、真宗大谷大学という名の専門学校から国家公認による大谷大学へと改称脱皮した際に、日本仏教史を担当した橋川正氏の説によるものと推察される。同氏が国史学講座初代主任教授に就かれた大正13年刊の著『真宗史要』において、寛文5年草創説を初めて披瀝しているからである。明治34年の『真宗高倉大学寮沿革略』、およびそれより少し以前の『真宗大学寮沿革略誌』によっても、「寛文年中」としかみられず、また大正13年刊の山田文昭氏著『真宗史』も「寛文年間」と述べているのである。

この以後、昭和5年に岡崎正謙氏が寛文4年説を、昭和19年に武田統一氏が寛文元年～5年公許説（創設とはしない）を唱え、戦後は昭和38年に、柏原祐泉氏が寛文元年～5年草創としてきたものの、大学の出版による冊子には寛文5年説がずっと踏襲されて現在に至っている。今般の学事研究においても、学寮草創期資料の蒐集検索に努めているが、すでに武田統一氏によって示されてきた、『粟津日記』寛文12年（但し武田氏は寛文11年と誤る）6月18日条にみえる、常如法主が「講堂観音院へ御成」あったとの記事を初見として、それ以前には遡り得ていない。寛文5年説の根拠は、講師理綱院慧琳（1789没）の筆による、草創期の学匠能登往還寺樹心の伝記史料中にみえる、「寛文5年乙巳浪華の御門徒高木宗賢資財を献して学寮を創建す」の一節である。高木宗賢による講堂建物寄進は延宝6年とみられ、明らかに混乱錯誤していることは、同資料末尾に「年代悠邈にして載籍闕如す、ただその伝聞なるのみ」とあるを見れば、100年余を経た当時においても草創年次は確定できず、寛文5年が伝承中の年次であったことがわかるであろう。ただその伝承が慧琳講師によって記されたことの意味は大きいとせねばならない。往還寺智春の記す同寺由緒と称する延享2年（1745）の樹心伝記史料では、延宝6年頃に樹心が講堂建立に尽力した様子を顕彰しており、そこでは寛文年間のことは出てこない。慧琳と智春の立場の違いによるものである。この両資料は本学図書館に写しを蔵するが、原本はともに石川県珠洲市の往還寺所蔵であり、是非拝見して慧琳自筆であるかの確認と、智春による延享2年筆原本の確認調査をしなければならない。ともかく、従来の諸研究を総合して寛文初年～5年頃の草創は動かないにしても、寛文5年とすることは伝承によるものであって慧琳の記した以前には見えず、またその年次を明証する別資料も発見し得ない。大正10年まで草創年次への詮索は学寮側からはさほどなされず、大谷大学の設立を機に、寛文5年説が史学的資料調査の中から浮上して現在に及んでいるものと考えてよい。

2．太宰府観世音寺学寮の名跡継承について

東本願寺の学寮は、その創設にあたって徳川幕府の新規にことを設けることへの禁制が厳しかったため、当時名称だけを残すに至っていた太宰府観世音寺学寮の名跡を継承する形式をとって公許を得て開設された、と通説される。名跡継承のことは、明治期の沿革誌においてすでに記しており、観世音寺学寮の「名を移す」「規模を移す」「講堂を移し旧名を襲ぐ」とみえている。刊本にみえる最初は、明治17年刊の小栗憲一氏著『豊絵詩史』の巻上の、「当時幕府の制、厳しく新規に事を設くるを禁ず、苟くも旧例無くば、概斥して允さず、……聞く、太宰府観世音寺は旧都督府の巨刹たり、往昔学寮の設有るなり、必ずや、今その名義を復興して西京に移さん」であり、この書は事績を恵空講師に関わるものと記す誤りをおかしてはいるが、これが名跡継承についての通説

の基調を述べているといえよう。資料調査によると、幕末期慶応2年（1866）成立とみられる『本山記録綴』に肥前唐津安楽寺（後述）の申物願に添えた由緒書を留めており、そこに「高倉講堂之義筑後太宰府観世音寺ニ在之候講堂ニテ御座候処、……御当山ニ御引ニ相成候様御取持申上候……」と、安楽寺玄保、玄昌（一保）兄弟の仲介関与があって観世音寺講堂を本山へ引いたとある資料までしか遡及できない。

観世音寺は寛永7年（1630）の台風で講堂（観音堂）が倒壊し、元禄元年（1688）に再興されるまでは仮堂（現金堂）を営んだ衰退期にあった。この期にあって講堂もしくは学寮の名跡を東本願寺に譲ることはあり得ないこととともいえまいが、このたびの観世音寺文書調査では、観世音寺側にこれを載せる資料、あるいは伝承もまったくなかった。仮りに講堂または学寮にあたる建造物を、同寺所蔵の室町期大永年間（1521～28）製作とされる『観世音寺絵図』に基づいて比定してみるに、7間×5間の「講堂」（本堂）、そしてその背後の矩形の「学問所」（僧房）以外には考えられない結果となった。宝永7年（1710）刊の『筑前国続風土記』はこの絵図について、「本尊（講堂）の後に惣坊とて長き家あり。是学寮なりけるにや。」と記し、従来、漠然と観世音寺の境内もしくは旧境内地の片隅くらいに学寮跡とされる旧地があるのだろうと想像してきたのとは相当に異なり、極めて中心的な建物であったものと考え直さねばならないかも知れない。文書調査からは問題の寛文年間の同寺にあっては、触頭寺院への帰属問題、戒壇院との分離問題などで、同寺の公的扱いと当時住持職を称した者との間に、かなりの圧軋があったことが推察された。いずれにしろ、学寮は講堂と寮舎から成り立つものであり、後世寮舎が「御長屋」とも称されていることからみても、ほぼ四角形の講堂と矩形の寮舎とを配置する形式を観世音寺に学んだことはあったともいえる。しかし、「規模を移した」とは大きさそのものを移したことでは決してないし、「名を移した」ことの明証もない。東本願寺学寮側だけの伝承であり、それも学寮そのものにでなく唐津安楽寺の由緒に関わることとして語られてきたことであった。幕府公許を得るためにとの説も、西本願寺学林や高田専修寺学寮にその例もないので根拠は薄く、何よりも史料的に幕末期までしか遡り得ないのは気にかかることである。名跡継承があるとすれば、あくまで、「学寮」の名称そのものを移したにとどまろう。

3．安楽寺玄保等の建議関与について

学寮創設の直接的契機として、琢如法主時代の万治2年（1659）に、本山寺内において日蓮宗との間に法論が発生し、当時南禅寺に修学中の唐津安楽寺玄保・玄昌（一保）の兄弟が駆けつけてこれを屈服せしめた事件があったという。琢如法主はこれを賞して玄保を堂僧とし、他宗他派との法論および均衡の上から宗学研究機関の設置を意図され、玄保兄弟は観世音寺学寮の移取を推挙しこれに尽力して草創が成ったとされる。これは先述の幕末期成立『本山記録綴』に安楽寺由緒の形でみえるものであるが、学寮の名跡継承のことは一応検討したとして、玄保・玄昌兄弟について、唐津安楽寺を訪ねて調査した結果を記す。安楽寺は豊臣秀吉に従った名護屋六坊の一つ端坊明然から発し、毛利元春の三男元氏が端坊順了と号して系譜をひき、順栄を経て玄保は『安楽寺過去帳』『毛利之系図』（安楽寺所蔵）に第4世と記される。一保はその弟で美濃廓念寺の祖となっている。一保が廓念寺を開基して玄昌と称したことは明治12年の『更正寺院明細帳』にみえるところであって、そこでは法論勝利の功を賞して寺号を許され、のちに美濃（大垣）に移ったと記す。武田統一氏著『真宗教学史』が玄保・一保を同一人と錯誤していたことが明らかになったことを含めて、両人の実在は確認された。安楽寺什物の内、御絵伝4幅は、裏書によって玄保を願主として琢如法主より下附されており、第一軸は万治3年、すなわち法論翌年の下附であり功賞によるといえるかもしれない。第二軸以下は2年後の寛文2年下附であった。『安楽寺縁起』にも「御絵伝は寛文二年六月二十八日琢如御判願主玄保也」と出るところである。ところが、調査によっても安楽寺自体には、日蓮宗論破・観世音寺学寮名跡継承への建義尽力の二つで本山学寮草創に寄与したことを記す記録は現存せず、現住職も全くそうした伝承すら聞いたことがなかったとのことであった。

4．今後の課題

以上の調査結果からみて、学寮草創に関しては、極めて資料の乏しいことが判然しよう。今後の課題としては、寛文年間に少しでも近い本山・学寮側資料による関係記事検索作業を進めながら、学寮創立の精神的意味と社会的意味の二方面について、極力考えていかねばならないかと思う。また事実関係の追求では、延宝6年の独立講堂創建の時の大施主（寄進者）であった高木宗賢が大阪でも有力著名な両替商平野屋五兵衛その人であり、また平野屋は同時に唐津藩掛屋商人であることを考慮して、寺院およびそこの学問僧と、それを支援する大商人との関係を解的ズすることからほぐれていくところが期待されるのではあるまいか。

学寮草創を徳川治世との関係（学問奨励・対仏教政策）から位置づけるのが常識であったが、教団内的要請と外からの期待との合致による必然性について、よりしっかりと把握していかねばならず、また近世社会および文化への意味を明確化する必要があろう。

『真宗学事研究』研究会報告
日時：昭和61年10月31日㈮
場所：研究所会議室

〈指定研究〉

『校本　高倉学寮諸制條類纂』編集記

研究補助員　深　田　虎　雄
（日本仏教史学）

当学事研究班では、昭和61年度の研究作業の一つとして、「大谷大学300年史」に関連する条規・法令類の集成に着手することになった。これを一応明治以前と以降に分け、それぞれ研究補助員が史料収集を分担し作業を進めてきた。このうち明治以前の分を、寛文５年（1665）学寮草創より明治６年（1873）貫練場と改称に至るまでとし、この程50篇の条規類を収録し『校本　高倉学寮諸制条類纂』としてまとめる作業が一段落した。もとより素稿の域を出ないものであり、改めて厳密な検証と推敲が加えられなければならないが、とりあえずの研究資料として利用されたい方には差し上げることができるのでお申出いただきたい。

一　時代区分

東本願寺がその末寺門侶の教育を、後に「高倉学寮」と称される僧校に委ね、貫練場と改称されるまでの210年間を、その所在地によって区分すればつぎの３時代となる。

1　東坊（ひがしのぼう）時代　もと西派の学匠了海師が故あって東派に転属し、不明門通り七条上ル東坊（現東光寺）に住して以来、その碩学を慕って好学の堂僧が東坊に集まり、継続的に研修会が開かれるようになり、この私塾を東本願寺の僧校として公認したのが寛文５年（1665）とする。以後14年間、東坊が講堂であった時期である。

2　御長屋時代　延宝６年（1678）浪華の富商高木宗賢の財施があって、枳殻邸西側に通称「御長屋」と呼ばれた独立の学舎を新築、以後77年間ここに僧校のあった時期である。「学寮」の呼称は、この時期から上檀間日記或いは古地図などに散見するが、それが草創当初からであったのかどうかは確かめ難い。

3　高倉学寮時代　「御長屋」が老朽かつ手狭となり、宝暦５年（1755）高倉通リ魚棚の元御屋鋪跡に本格的な学舎を新築移転、この時から「高倉学寮」「御学寮」の名が定着する。その後天明８年（1788）安政５年（1858）元治元年（1864）と三度焼失したが、いずれもこの高倉の地を動かず、今に高倉会館としてその名残を留めている。これが明治６年（1873）貫練場と改称されるまでの119年間の時期である。

二　各時代の諸制条

1　東坊・御長屋時代の諸制条

学寮草創より90年に亘る東坊・御長屋時代の記録は稀少であって、史料の空白期である。たとえば「山家学生式」「綜芸種智院式」或いは吉崎御坊開創についての御文に類するような設立趣意書も見当らず、学寮草創の縁起伝承（本山の法難・筑紫観世音寺の学問所の承継）やその年時についても未だ確証するに足る史料が不足のようである。僅かに、〝寛文年中御壁書之写〟の前書きのある講筵規則三ヵ条（『校本』条規番号③、以下同じ）と、粟津文庫中の延宝２年（1764）所化心得五ヵ条（②）の二篇を収録し得たに止まる。東坊時代はさておき、御長屋時代は80年近くも集団合宿生活が続いたわけであるから、そこには何程かの約束事・指示・とりきめが無かった筈はない。御長屋創建に功あった樹心師が〝禅家ノ清規ヲ模シテ別ニ準則ヲ建ツ〟と能登往還寺由緒（「学寮法則」所収）にあり、宝暦５年の慧然言上書（④）にも〝古来ノ法式ニ準ジ規格存ジ寄リ〟を言上するとある。思うに、御長屋の収容人員はせいぜい20人程度の少数と推量され、その経営規模も単純素朴で、こと改めて記録に留めるほどの条規類を作る必要は無かったのではあるまいか。次代の宝暦５年制定の条規群の中に、御長屋時代より伝承されたかと思われる箇条も少なからず見受けられるが、今はそれと確証する由もない。

2　高倉学寮時代の諸制条

(1)　宝暦年間条規群

大谷大学図書館に、「学寮諸制条」「学寮諸規則」「学寮法則」など条規集の表題を附した書写本数本が所蔵されている。これらは専ら条規類だけの写本であるが、「澄海日記」「御学寮要録」「香山院師手控」など、日記・要録・備忘録類でその中に重要な条文のみを抽出して収録した文献もある（『校本』文献史料参照）。その多くが「寛文年中御壁書」又は「講筵規則」（③）と題する下間治部卿以下四名の連署による三ヵ条の達し書きを最初に掲げ、宝暦五年乙亥の日付を持つ十数篇の条規群を、全篇

的に或いは断片的に収録している。

宝暦5年（1755）は、学寮が高倉通り魚棚の地に新築移転、規模大いに整い面目一新した年である。この時に当たつて講師華蔵庵慧然師はその言上書（④）に見られるように、明確な学寮体制を確立すべく夏安居講に臨んで一挙に成文にした新条規群を発し、これを記録に留めさせた。記録役はこれら文書で達せられた条規は勿論、要所要所に貼り出された心得、注意書きの類に至るまで丹念に収録し『学寮諸制条』一本にまとめ、代々知事所がこれを管掌することになった。毎年新入所化のオリエンテーションが知事・寮司役の重要な任務であったから、彼らはその必要上この『学寮諸制条』を借り出して書写しこれを教本として所化の指導に当たり、また熱心な所化たちもこれを書写して座右においたことであろう。これが次々と引きついで書写されて行き、その中の数本が今日大谷大学に所蔵されるに至ったのであろう。これらの一連の条規群は、後に若干の補正を加えられる部分もあったが基本的には変容することなく、後世「寛文年中之御壁書」「古来之御制法」などと神聖化され、明治御一新に至るまで120年間に亘り一貫して学寮の機構、学風を規制しつづけるのである。

これらの写本はいずれも個性の強い行草書体の筆写であり、かつ年代を重ねているので、誤読・誤写・欠落が随所に見られ、時として意味の通じ難い文体になってしまっている。そこで作業は先ず諸本を一字一句校合し、誤写を正し欠落を補正し、意味のとおる文章に作り上げることから始まった。『校本』と名付ける所以である。

これら条規群のうち、学寮機構に関すふものとしては③講筵規則④慧然言上書⑤学寮規定⑥入寮誓約⑦直日勤務⑨守衛勤務⑫安居規定などがあり、他は⑧外出⑪入浴⑫賄役⑩⑭日常生活等についての心得、注意などである。前代には記録するに値しないと思われていたかも知れない一見つまらぬ心得書き類が、実は学寮生活の実態をうかがい知る手がかりとして今は貴重な史料である。

(2) 宝暦年間以降の諸条規

宝暦年間条規群を収録した諸本は多少の相違はあっても一つのまとまった群の体裁を具えているが、それ以降の条規類の収録は各本まちまちで統一が見られない。恐らく原本『学寮諸制条』は宝暦年間条規群の収録を以て完結した一本とし代々知事所に承継され、それ以降は写本の所持者がそれぞれ勝手に書き加えて行ったものであろう。それらの中から40篇を選んで収録した。そのうち、機構に関するものとしては⑮春秋二講開筵⑯奉行職新設㊺護法場開設など、学階に関しては⑮⑲擬講、擬寮司職新設⑰講師職処遇㉓㉔㉖転席、落席、復席規定などがあるが、その他の多くは〝往古ノ御制法ニ則リ〟綱紀粛正、学風振興すべきことの布達、それに答える決意の表明などである。例えば、明和3年（1766）講師職の処遇が、

一、今般以思召、内陣ニ被成御取立候事

一、御合力一ヶ年銀子貳拾枚、御扶持方三人扶持可被下候事

など8ヵ条を以て定められるが（⑰）、それから100年後の慶応元年（1865）最後の講師香山院龍温の講師拝命にもそっくりそのままの条文が適用されている（「香山院師手控謄写」）ように、古法墨守の保守色に頑固に塗りつぶされた120年間の学寮の姿がうかがいみられるのである。明治元年（1868）旧弊打破の烽火が護法場に挙がり（㊺）、明治6年（1873）学寮が貫練場と改称されて（㊽）いよいよ学制改革が緒につくこととなる。

三　学寮条規集編集の意義

今日まで先学の手によって熱心に学寮の研究が進められ、われわれはその学恩を享けている。しかしその業績は主として学寮のトップである講者諸師の経歴・教学・著作等に向けられ、学寮そのものの機構や実態、更に所化（学生）の寮生活の秩序・研修活動・修学年数・学費等々、総じて学寮の〝生態〟については未だほとんど手がつけられないままであるが、学寮諸条規はこれらを解明する重要な手がかりとなろう。なお当研究班では目下『上首寮日記』『講師寮日記』の翻刻に着手しているが、学寮諸条規と合わせ読むことによってより深い理解が得られるであろう。

こうした高倉学寮という東本願寺の教育機関の解明は、当学園関係内だけの理解にとどまらず、広く日本史的視野から位置づけられる必要があろう。例えばこの条規集に現われる「寮司（りょうす）」を手がかりとしてこのことを考えてみよう。「寮司」とは当初は寮長の役職名であって、学寮に7寮棟があったから、7人の所化が選ばれて交代制でこの勤務に当った（④）。ところが後に所化たちが学寮に長期に修学した学歴として寮司の名称を欲するようになり、この要望に応えて一定の条件を充たした者には寮司の称号を与えることになった。（⑲）。役職としての寮司が学階的身分に実質的に変容するのである。資格取得の条件として修業年限、人品査定規準項目など細かく規定されるが、70日間の夏講、30日間の秋講を最低15年間は皆勤しなければならなかったから、今日の学士号取得などよりはるかに厳しいものであった（㉓㉔㉖㉝㊴㊵等参照）。おのずから裏口取得の奸策を弄する者が現れ、権勢者の特別推挙・選考者の恣意依怙・学歴のゴマ化し・贈収賄などが横行し学寮紛糾の種となり、屢々人事公正の布達が発せられる（㉖㉟）。それほどまでして何故に寮司という身分を欲したのか。言うまでなく学寮修業の価値が高く評価され権威づけられたからであって、「学寮寮司」の名のりは本山の飛檐一余間一内陣の常班身分制に匹敵するか或いはそれを凌駕する底のものではなかったかとさえ推量される。夏講には毎年1,000名以上（天保元年1,705名、同9年1,847名が最多記録）の多数が全国各地から学寮に蝟集した所以はここにあ

る。僧俗両衆によってかくも高く評価された学寮出身僧が地方自坊に帰り、その寺檀制の中で江戸近世期の日本人の人間像形成に決定的とも云える役割を果たすのである。江戸時代の教育史では、藩校・私塾・寺子屋・徒弟制など多方面に亘って研究業績が深められて来ているが、寺院教育の面が大きく欠落している。この穴埋めは重要である。高倉学寮諸制条の研究が、このことに大きな貢献をすることを期待したい。　1月11日記

『海外仏教研究』研究会報告（要旨）　〈指定研究〉

ジョン・ロス・カーター博士による仏教特別セミナーの開催について

昭和61年の3月18日より4月22日のあいだ、本研究所はコルゲート大学教授、ジョン・ロス・カーター博士（Dr. John Ross Carter）による仏教特別セミナーを開催した。この一般公開のセミナーは、主として京都留学中のコルゲート大学学生約20名のために、カーター博士が行なったものであるが、本学の教員や大学院生も多数聴講し、また学外からも数人の学生等が参加した。

コルゲート大学はアメリカ東海岸のニューヨーク州の北部のハミルトン市にある。緑にかこまれた美しい私立大学である。この大学では、以前から、毎年数人の学生を日本へ派遣する留学制度を実施している。これらの学生は日本の家庭でホーム・ステイすることを通じて、日本の生活に親しみ、また日本語の授業を受けたり、日本の社会や文化の講義も受ける。そしてそれらは大学の単位として認定されている。今回の仏教特別セミナーもこのようなプログラムの一貫として行なわれたものであった。そしてそれが一般公開という形で、本研究所で開催されることとなった。

講師のカーター博士はスリランカの仏教を中心に研究を行われている。1978年には Dhamma: Western Academic and Sinhalese Buddhist Interpretations (Hokuseido) を出版され、また最近では The Threefold Refuge in the Theravada Tradition (Anima Books, 1982) という帰依三宝についての論文集を編集されている。しかし聞くところによるとカーター博士の関心は仏教教理よりも、むしろ「生きた仏教」にあるらしく、いかに人間が仏教を依り所として人生を送って行くのか、ということを知ることが最大の課題のようである。またこのような関心からであろうか、ちかごろ浄土真宗の研究にも着手されておられる。ちなみに、昭和60年の12月17日と昨年の3月4日と二回、研究所ではカーター博士を招いて、海外仏教研究班の研究例会を行なったが、二回とも真宗の「信心」について言及された。特に二回目の例会では "Shinjin: More Than 'Faith'?" という、大変興味深い発表をして頂いた。なおこの発表の原稿は『研究紀要』第四号に掲載される予定である。

さて、仏教特別セミナーの主題は Living in the Buddhist Heritage in Japan（「日本の仏教の伝統の中で生きる」）というものであった。このセミナーは週二回（水・木曜日）二時から三時半のあいだ行なわれた。その日程と内要は次のようなものであった。

1．3月18日
What is *there* to study? And how? And why?
（序論。宗教を研究することの意義及びその基本的態度）

2．3月20日
Who was the Buddha? And what was his way? Where am I? Who is the Buddha? Is there a way?
（釈尊と仏教の基礎的教義）

3．3月25日
Neither coming nor going! Gaining to give away, but neither gaining nor giving away. Abiding in emptiness and beyond.
（大乗仏教の起源と菩薩思想。中観仏教。）

4．3月27日
On the one and the manifold. The thusness of suchness. Change and continuity in the Chinese context. Studying, sifting, sorting, and selecting. Transmission and transformation
（唯識仏教の展開。中国における仏教の伝来と展開）

5．4月1日
The Japanese Matrix — Accepting, appropriating, and applying. Indigenization and institutionalization
（日本における仏教の受容、特に平安時代までの発展）

6．4月3日
Response and revival: We must be on the move! Nichiren-shu

(日蓮)

7．4月8日

Refining and returning: Don't make a move! Zen

(禅仏教)

8．4月10日

Receiving and renewal: We can't make a move! Jōdo-shinshū

(浄土真宗序説)

9．4月15日

The Cosmos is compassionate: catalytic complementariness and mutual negation through contradiction into reality—Jōdo-shinshū

(『歎異抄』を中心としたディスカション。)

10. 4月17日

The Final Examination

(試験)

11. 4月22日

Last day of class. Comparative witness bearing or conflicting truth claims? Agnostic, Atheist(?), Christian, Jewish, Shin Buddhist — in what sense? What *is* there to study? And how? And Why? Where am I?

(最終講義。宗教を研究することの意義をふたたび考える)。

以上が仏教特別セミナーの概要であるが、このセミナーを通じてカーター博士は、ある特定の宗教を研究することは、実はその宗教を依り所として生きている人々を研究することにほかならない、ということを主張しつづけた。つまり「仏教」は仏教の教義にあるのではなく、自ら仏教徒と自認する人々の中にあるのである。最終的に仏教（及び他の宗教）を研究するということは、「人間」を研究することでなければならない、という基本的見解がカーター博士の講義の底を流れていたようである。

わずか六週間という短い時間ではあったが、セミナーの参加者は、アメリカ式の授業を、英語で受けるよい機会に恵まれた。さらにカーター博士の含蓄深い宗教観・仏教観に触れることもできた。今後もこのようなセミナーが研究所で開催されるように期待するところである。

(文責　ロバート・F・ローズ)

『海外仏教研究』作業報告　　〈指定研究〉

1986年　10月現在

海外仏教研究所蔵雑誌目録

嘱託研究員　ロバート・F・ローズ
資料整理員　本田パトリシア

海外仏教研究班では、研究発足当初より、欧米諸国で1960年以来発行された仏教学関係の著作・論文文献目録の成作にとりくんできた。そしてその一貫として、基本的著作・論文の蒐集作業も行なってきた。そこで1984年度までに、主な研究書は入手することができたので、1985年度では仏教学関係の論文を多く掲載する欧米及びアジア諸国の学術雑誌のバックナンバーを重点的に蒐集することにした。現在海外仏教研究では約五十種数の定期刊行物を購入しているが、その中から特に本研究班に必要と思われる仏教学・宗教学・東洋学などの分野の学術雑誌三十四種を選び、それらのバックナンバーを購入した。ほとんどの場合、1960年からの全号をセットとして入手することは不可能であったが、これらの資料を入手することにより、研究班の図書室もかなり充実し、文献目録作成に大きく貢献した。そこで、これを機会として、従来蒐集してきた主要雑誌の一覧表を作成し、公表することにした。

(なお一覧表の作成について本田パトリシア資料整理員の助力を得た。)

所蔵雑誌目録

1. Acta Orientalia (Copenhagen)
20 : 1 (1948)～46 (1985).
2. Acta Orientalia (Budapest)
38 : 1–2 (1984)～39 : 2–3 (1985).
3. Annals of the Bhandarkar Oriental Research Institute (Poona, India)
65 (1984)～66(1985).
4. Artibus Asiae (Ascona, Switzerland)
28 (1966)～47 : 1 (1986).
5. Asian Folklore Studies (Nagoya) [formerly called *Folklore Studies* up to Vol. 21 (1962)]
1 (1942) ～ 7 (1948), 10 : 1 (1951) ～ 12 (1953), 14 (1955), 17 (1958)～24 : 2 (1965), 26 : 1 (1967)～45 : 1 (1986).
6. Asiatische Studien (Bern)
38 : 1 (1984)～38 : 2 (1984).
7. Bibliography of Asian Studies (Ann Arbor)
1972 (1974)～1981 (1985).
8. Buddhist-Christian Studies (Honolulu)
1 (1981)～4 (1984).
9. Buddhist Research Information (Stony Brook, NY)
1 (1979)～10 (1983). Cumulative Index 1–3 (1980), 9 –10 (1983).
10. Buddhist Studies Review (London)
1 : 1 (1983–84)～2 : 1–2 (1985).
11. Buddhist Text Information (Stony Brook, NY)
1 (1974) ～ 44 (1985). Cumulative Index 1–13 (1977), 31–34 (1982), 39–42 (1984).
12. Bulletin of the School of Oriental and African Studies (London)
27 : 1 (1964) ～ 47 : 3 (1984), 48 : 2 (1985) ～ 49 : 2 (1986).
13. Bulletin Signaletique 527 : Histoire et Sciences des Religions (Paris)
40 : 1 (1986)～40 : 2 (1986).
14. Central Asiatic Journal (Wiesbaden)
1 : 1 (1955) ～ 28 : 3–4 (1984). Index 1–10 (1967), 11–20 (1976).
15. Cheng-chi Yen-chiu-so Nien-pao [Bulletin of the Institute of China Border Area Studies] (Taipei)
15 (1984)～16 (1985).
16. Chinese Culture (Taipei)
25 : 3 (1984)～27 : 3 (1986).
17. Contemporary Religions in Japan (Tokyo)
1 : 2 (1960)～11 : 3–4 (1970).
18. Dedalo: Revista de Arqueologia e Ethnologia (Sao Paulo)
23 (1984).
19. Doctoral Dissertations on Asia (Ann Arbor)
2 : 1–2 (1976–77)～5 : 1–2 (1982), 7 : 1–2 (1984)～8 : 1–2 (1985).
20. East and West (Rome)
10 : 1–2 (1959)～33 : 1–4 (1983).
21. The Eastern Buddhist (Kyoto)
2 : 2 (1969)～3 : 2 (1970), 4 : 2 (1971)～7 : 2 (1974), 9 : 1 (1976)～19 : 1 (1986).
22. Harvard Journal of Asiatic Studies (Cambridge MA)
25 (1964–65) ～ 42 : 2 (1982), 45 : 2 (1985) ～ 46 : 1 (1986).
23. History of Religions (Chicago)
1 : 2 (1962), 2 : 2 (1963)～4 : 1 (1964), 5 : 1 (1965)～5 : 2 (1966), 6 : 3 (1967), 7 : 3 (1968)～8 : 1(1968), 8 : 3 (1969)～9 : 1 (1969), 9 : 4 (1970)～10 : 2 (1970), 10 : 4 (1971) ～ 11 : 4 (1972), 12 : 2 (1972) ～ 13 : 2 (1973), 13 : 4 (1974)～14 : 3 (1975), 15 : 1 (1975)～16 : 3 (1977), 17 : 1 (1977) ～ 20 : 1–2 (1980), 20 : 4 (1981) ～ 22 : 2 (1982), 22 : 4 (1983) ～ 23 : 2 (1983), 23 : 4 (1984) ～ 24 : 3 (1985), 25 : 2 (1985) ～ 25 : 4 (1986).
24. Indo-Iranian Journal (Dordrecht, Holland)
4 : 1 (1960)～29 : 2 (1986).
25. Indologica Taurinensia (Torino, Italy)
1 (1973)～11 (1983).
26. Inter-religio (Nagoya)
3 (1983)～9 (1986).
27. Jahrbuch der Akademie der Wissenschaften in Göttingen
(1981).
28. Japanese Journal of Religious Studies (Nagoya)
2 : 1 (1975), 2 : 4 (1975) ～ 4 : 4 (1977), 5 : 2 ～ 3 (1978)～7 : 1 (1980), 7 : 4 (1980)～13 : 1 (1986).
29. Japanese Religions (Kyoto)
2 : 1 (1960)～3 : 1 (1963), 3 : 4 (1963), 4 : 2 (1966), 7 : 2 (1971)～14 : 2 (1986).
30. Journal Asiatique (Paris)
248 : 1 (1960)～272 : 1–2 (1984).
31. Journal of the American Academy of Religion (Atlanta) [formerly called *Journal of Bible and Religion* up to vol. 34]
34 : 3 (1966), 35 : 2 (1967), 35 : 4 (1967) ～ 54 : 1 (1986).
32. Journal of the American Oriental Society (New Haven)

102 : 1 (1982), 102 : 3 (1982)～104 : 4 (1984), 105 : 2 (1985), 105 : 4 (1985)～106 : 2 (1986).

33. Journal of Asian Studies (Ann Arbor)
32 : 1 (1972) ～ 42 : 4 (1983), 43 : 2 (1984) ～ 45 : 4 (1986).

34. Journal of Asian Studies (Madras)
1 : 1 (1983)～2 : 2 (1985).

35. Journal of Chinese Philosophy (Honolulu)
1 : 1 (1973)～13 : 2 (1986).

36. Journal of Chinese Religions (Denver) [formerly called *Society for the Study of Chinese Religions Bulletin* up to Vol. 10]
7 (1979)～8(1980), 10 (1982)～12 (1984).

37. Journal of the Hong Kong Branch of the Royal Asiatic Society (Hong Kong)
22 (1982).

38. Journal of Indian Philosophy (Dordrecht, Holland)
1 : 1 (1970)～14 : 2 (1986).

39. Journal of the International Association of Buddhist Studies (Madison)
1 : 1 (1978)～8 : 2 (1985).

40. Journal of Japanese Studies (Seattle)
2 : 1 (1975)～12 : 1 (1986).

41. Journal of the Nepal Research Center (Kathmandu)
1 (1977)～7 (1985).

42. Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland (London)
(1960) : 1–2 ～ (1968) : 3–4, (1969) : 2 ～ (1975) : 2,(1977) : 1～(1978) : 1, (1979) : 1～(1986) : 1.

43. Journal of the Tibet Society (Bloomington, IN)
1 (1981)～4 (1984).

44. Kailash : Journal of Himalayan Studies (Kathmandu)
10 : 3–4 (1983)～11 : 3–4 (1984).

45. Library of Congress Accessions List, South Asia (New Delhi)
3 : 1–2 (1983)～3 : 11–12 (1983), 4 : 2 (1984)～5 : 12 (1985). Serials supplement 1981–83, pt. 1.

46. Maha Bodhi (Calcutta)
68 : 1 (1960) ～ 68 : 2 (1960), 68 : 5 (1960) ～ 72 : 1 (1964), 72 : 3–4 (1964) ～ 72 : 6 (1964), 72 : 11–12 (1964) ～ 73 : 1 (1965), 73 : 3–4 (1965) ～ 74 : 3–4 (1966), 74 : 7～8 (1966), 75 : 1 (1967)～75 : 4(1967), 75 : 7 (1967) ～ 76 : 7 (1968), 77 : 3 (1969) ～ 77 : 11–12 (1969), 78 : 2–3 (1970)～78 : 12 (1970), 79 : 2–3 (1971), 79 : 5–6 (1971) ～ 79 : 12 (1971), 80 : 2–3 (1972)～81 : 4 (1973), 81 : 7 (1973)～83 : 1–3 (1975), 83 : 6–7 (1975) ～ 84 : 7–8 (1976), 84 : 10 (1976) ～ 85 : 6–7 (1977), 86 : 1–12 (1978) ～ 87 : 1–12 (1979), 91 : 4–6 (1983)～92 : 10–12 (1984).

47. Middle Way (London)
36 : 1 (1961)～39 : 2 (1964), 39 : 4 (1964).

48. Monumenta Nipponica (Tokyo)
16 (1960–61) ～ 18 (1963), 19 : 3–4 (1964)–28 : 1 (1973), 28 : 4 (1973)～29 : 3 (1974), 30 : 1 (1975)～30 : 4 (1975), 33 : 2 (1978)～41 : 3 (1986).

49. Monumenta Serica (St. Augustin, Germany)
19 (1960)～27 (1968), 29 (1970–71)～30 (1972–73), 32 (1976)～35 (1981–83).

50. Numen (Leiden)
1 (1954)～9 (1962), 11 : 1 (1964)～11 : 3 (1964), 15 : 1 (1968)～29 : 2 (1982), 31 : 1 (1984)～33 : 1 (1986).

51. Philosophy East and West (Honolulu)
13 : 2 (1963), 14 : 1 (1964) ～ 19 : 4 (1969), 20 : 2 (1970)～23 : 1–2 (1973), 32 : 1 (1982)～32 : 4 (1982), 34 : 1 (1984) ～ 34 : 4 (1984), 35 : 2 (1985) ～ 35 : 4 (1985), 36 : 2 (1986).

52. The Pure Land (Kyoto)
1 : 1 (1979) ～ 5 : 2 (1983), New series 1 (1984) ～ 2 (1985).

53. Religion (London)
1 : 1 (1971)～16 : 2 (1986).

54. Religious Studies (Cambridge, England)
1 : 1 (1965)～21 : 4 (1985).

55. Revue de l'Histoire des Religions (Paris)
197 : 1 (1980)～203 : 1 (1986).

56. Studien zur Indologie und Iranistik (Reinbek, Germany)
1 (1975)～10 (1984).

57. Tibet Journal (Dharamsala)
1 : 1 (1975)～11 : 3 (1986).

58. Tibetan Medicine (Dharamsala)
1 (1980)～7 (1984).

59. T'oung Pao (Leiden)
50 : 1–3 (1963)～71 : 4–5 (1985).

60. Transactions of the International Conference of Orientalists in Japan (Tokyo)
26 (1981)～30 (1985).

61. Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für Indische Philosophie (Vienna)
6 (1962)～11 (1967), 14 (1970)～29 (1985).

62. Young East (Osaka)
8 : 2 (1982)～11 : 3 (1985). 11 : 3 (1985).

63. Zeitschrift der Deutschen Morgenlandischen Gesellschaft (Wiesbaden)
134 : 1 (1984)～135 : 2 (1985).

64. Zen Buddhism Today (Kyoto)
1 (1983), 3 (1985)～4 (1986).

ロンドン・インド省図書館の一室から

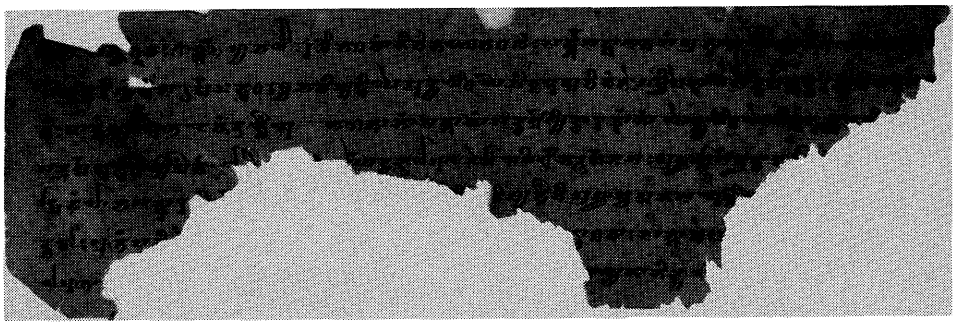
—スタイン・ペルンレ中亜梵語写本を調査して—

『西蔵文献研究』
研究補助員　松田和信
(日本学術振興会特別研究員)

東洋文庫の主宰する調査団の一員として、10月4日に成田を発ち、11月8日までロンドンのインド省図書館(India Office Library and Records)で過ごし、帰途パリの国立図書館(Bibliothèque Nationale)に寄り、11月16日に帰国した。調査団は昭和61年度文部省科学研究費補助金〈海外学術調査種目〉により組織されたもので、研究課題は「スタイン蒐集敦煌文献現地綜合調査」である。メンバーは榎一雄博士を団長に、名古屋大学の山口瑞鳳教授、国学院大学の土肥義和教授、東洋文庫専任研究員の福田洋一氏、東洋文庫チベット研究委員会の木村隆徳氏、東京大学助手の田中公明氏、それに私を加えた七名であった。なお榎博士は日本に残られ、土肥教授は漢文文献の調査のため大英図書館の東洋部に行かれたので、山口瑞鳳教授を中心に五名が出発から帰国まで行動を共にした。調査団の主目的は東洋文庫チベット研究委員会が刊行中の『スタイン蒐集チベット語文献解題目録』(既刊10分冊)の完成に向けての最終調査であったが、同時に中央アジア出土の梵語文献の調査も追加され、私がそれを担当した。専ら梵語文献を扱ったとはいえ、大谷大学所蔵のチベット語文献を扱う者の一人として、今回の調査旅行は大きな収獲であった。メンバーに加わることを薦めて下さった東洋文庫および山口瑞鳳教授、さらに一カ月半に亙る私の不在を快く認めていただいた真宗綜合研究所および西蔵文献研究班の小川一乗教授に感謝の意を表すとともに、スタイン文献の現状と、特に梵語文献についての新たな知見の第一報を述べておくことにしたい。

インド省図書館は元はイギリス外務省のインド局所属の図書館であったが、十年前、大英博物館(British Museum)から大英図書館(British Library)が独立した後、1982年になってそれに組み入れられ、今は大英図書館の一部となっている。大英図書館は博物館の有名な大閲覧室を中心に三十一のセクションが十カ所の建物に分散する大組織で、インド省図書館もそのセクションの一つである。インド省図書館だけでも百人以上の職員がいる。今世紀初頭、三次に亙るスタイン(M. A. Stein)の中央アジア探検が齎した厖大なドキュメントは、大英博物館とインド省図書館に分散して収められていたが、博物館にあったものは現在は博物館から1㎞ほど離れたストアーストリートにある大英図書館の東洋部(Department of Oriental Manuscripts and Printed Books)に移されている。従って敦煌の漢文写本も今はこちらにある。なお東洋部にはこれ以外に Or. 8212 という番号で種々な言語のスタイン文献が一括して登録されている。これは内部が細かく分かれ、私は1926番まで見ることができた。この中の1番から73番まではすべて梵語文献であり、さらに1361番から1926番の中には殆ど小さな断簡ではあるが、梵語文献が含まれている。195番までは東洋文庫にもマイクロフィルムが来ている。私は東洋部には二日間しか足を運べなかったので断言はできないが、この中にはここで取り上げる『涅槃経』の断簡はない。スタイン梵語写本のうち東洋部では主として Or. 8212 に含まれるものに注意すればよいので、あとはインド省図書館のコレクションである。なお現在博物館の北に新たな図書館本部建物を建設中で、完成すればインド省図書館と東洋部は統合され、1992年にはそちらに移るそうである。やがてすべてのスタイン文献を一カ所で見ることができるようになるわけである。

さてロンドンに着いた我々五名はハイド・パークに面した小さなホテルから地下鉄を乗り継いでウォータールー駅で降り、そこから下町の雰囲気の残るイーストエンドを少し歩いてブラックフライヤーズロードのインド省図書館に毎週月曜日から金曜日まで通うことになった。図書館ではロンドン市内を一望できる最上階十一階に専用の一室を与えられ、さらに大学を出たばかりのマーガレット・ウィルソン(Margaret Willson)嬢が朝から夕方までずっと我々のそばにいて仕事を手伝って下さった。因に彼女は卒業論文に東インド会社を取り上げてインド省図書館の資料を見に通ったそうで、手が空けば小説『ショーグン』を読んでいた——ここには三浦按針(ウィリアム・アダムス)が東インド会社経由で本国に送った手紙がたくさん保存されている——。我々は見たい写本を彼女に伝え、彼女が担当の司書の陽気なアイルランド人、マイク・マーハー(Michael Maher)氏に電話



(注) 写真は大乗『涅槃経』C写本断簡、ヘルンレ・コレクションNo.147-SB-109裏面、サイズ9.3×30.0cm、一行目に ....tathāgatagarbhaḥ sarvbasatvānām saṃprakāśayiṣyatīti (原文のまま) の一文が見える。対応漢訳は大正蔵12巻399a6.... 広説衆生悉有佛性。

をかけ、氏が四階の書庫から写本の入った箱を運んで来るというわけである。でも我々は次々と注文して返却しなかったのでチベット語と梵語写本のほとんどは十一階に運ばれ、書庫の中亜文献の棚は空になってしまうほどであった。また図書館の保存部には松岡久美子さんというロンドン生まれの唯一の日本人職員がいる。彼女がいたおかげで私の怪しげな英語もどれだけ助けられたかしれない。このように我々は図書館当局の配慮と三人の方々の助力もあって全く自由にすべての写本を手にとって見ることができた。まさに特別待遇であった。

インド省図書館にはスタイン・コレクション以外にも、ヘルンレ(A. F. R. Hoernle)が独自のルートで集めた中亜文献が保存されている。大谷大学図書館はヘルンレのインド学関係の旧蔵書約四百冊を所蔵しているのでヘルンレの名前を知っている方も多いであろう。二年ほど前に私は、福田洋一氏の手を煩わせ、東洋文庫にあるスタイン・ヘルンレ中亜梵語文献のマイクロフィルムからの焼付写真約五百枚(多いもので一枚に十数葉の写本断簡が写っている)を取り寄せてはいたが、斜めに見た程度で放置したままであった。ところが昨春京都に来られたソビエト科学アカデミーのボンガード・レヴィン(G.M.Bongard-Levin)教授からレニングラードにある中亜本の大乗『涅槃経』の写本六葉やその他のテキストを出版した *Bibliotheca Buddhica XXXIII* (Moscow 1985)をいただいた。私は手元にある写真が気になり、改めて調べてみた。するとその夜のうちにレニングラード本『涅槃経』の第二葉の失われた右側の断簡を東洋文庫の写真の中に発見したのである。一葉が切断され左側はレニングラードに、右側はロンドンに保存されていたのである(これについては最近東京の国際仏教学研究所から出たレヴィン教授の新著に付け加えられている)。驚いた私はさらに詳しく写真を調べ、「寿命品」に属する大きな一葉を見い出した。このような事情があったので、私はロンドンの中亜写本に関心を持つようになった。『涅槃経』の写本はこれだけであろうか、東洋文庫の写真はすべての写本を撮影したものであろうかと。

結論から言うと、東洋文庫のフィルムはインド省図書館のスタイン・ヘルンレ写本の三分の二程度を収めるにすぎなかった。しかもこのフィルムの原本は今はなく、マーハー氏によると古くなったので廃棄処分になったらしいとのことであった。なぜ東洋文庫のフィルムが写本を網羅していないのか、例えば本田義英博士の出版した『西域出土梵本法華経』の最初に出ている Kha-i-24 の二葉は東洋文庫のフィルムには収められていない。しかし私が書庫に入り、探してみると、乱雑に積み重ねられた書類の束の中から出てきたので、東洋文庫のフィルムが撮られた1950年当時は今よりも写本が整理されていなかったのかもしれない。現在写本は四十五個の木箱と二つのダンボール箱、それにいくつかのペーパーホルダーに収められている。ただし Box 1 から 13、Box 15 から 23、Box 35 から 40 はコータン語文献を収める。Box 30 から 32、Box 41 から 43、Box 45 がスタイン写本で、他はすべてヘルンレ写本である。スタインよりヘルンレ写本の方が量的に多い。一つの箱に数枚ないし数十枚のプレートを、一枚のプレートには一葉ないし十数葉の写本断簡を収める。なおこれらとは別にクッチャ語の木箱が三つある。

さて注目すべき『涅槃経』であるが、様々な写本をノートに取りつつ調べてゆくうちに、その中から約三十枚の断簡を新たに発見した。完全なものは僅かで、半数は小さな断簡である。いずれもグプタ・ブラーフミー文字で書かれているが、サイズ、書体、行の並び等から判断して、三種類の写本があったことがわかる。仮にA、B、Cとしておこう。私は半数を同定しただけであるが、残りも同一写本の一部であることは間違いない。また既同定のものを見る限り、すべて六巻本の『涅槃経』に対応箇所を持つ。ロンドンには六巻本部分の漢訳とチベット訳しか持って行かなかったが、中にA写本に属する同定不能の完全な一葉を含む三葉があった。帰国後調べてみると、二葉は法華部の『大乗方広総持経』(大正No.275)、

一葉は『八佛名号経』(大正No.431)の一部であった。A写本は『涅槃経』が終った後、これらの別な経典が続いて書写されていたらしい。レニングラードにある六葉のうちの五葉、F. W. トーマスがヘルンレの *Manuscript Remains* の第1巻の中に出版している一葉もA写本である。無論この一葉もインド省図書館で見ることができる。ヘルンレは第2巻の出版に着手しつつ亡くなったが、その原稿がMss. EUR. D. 723という登録番号で保存されている。見ると、ヘルンレはラヴィグプタの医学書『シィッダ・サーラ』のコータン語訳を出版する予定であった——その後これは別な人によって出版されたので、原稿はもはや歴史的価値しか持たないのかもしれない——。レニングラードの第五葉はB写本である。C写本は今回まったく新たに見い出されたもので、六つの大きな断簡よりなる。この三組の写本断簡は、三組ともスタイン・ヘルンレの両コレクションに散在している。スタイン写本に属するものはすべて西域南道のコータン近くのドモコ・オアシスにあるカダリック遺跡出土の写本であることがはっきりしているので、出土地不明のヘルンレ写本もカダリック出土とみなしてよいであろう(無論レニングラードのものも)。私はスタイン写本については『涅槃経』の断簡をプレートより取り出し、保存部の協力を得て新たなプレートを三枚作成した。ヘルンレ写本はプレートが密封されていたため、取り出すことは不可能であった。これら約三十枚の断簡は、許可を得て私自身の手でカラーおよび白黒写真を撮り持ち帰った。すでに正式の手続きを経て写真の出版許可もいただいたので、近いうちに公刊したいと思っている。またすべての写本のマイクロフィルムの発注も済ませて来た。いまだ学界に紹介されていない『法華経』『首楞厳三昧経』等の新断簡が数多くあることも確認しているので、別なテキストにも目を向けてみたいと思っている。

インド省図書館の中亜梵語写本は、閲覧室にも事務室にも目録もカードもなく(従って一般来館者が個々の写本を請求しても館員には探索不能)、マイクロフィルムも廃棄され、プレートは埃にまみれ、長い間研究された形跡もなかった。今回の私の調査は一体何年ぶりか、何十年ぶりか。文献解読の、楽しくスリルに満ちていた図書館の一室とロンドンの親切な人々に思いを馳せつつ、いまは少しずつではあるが持ち帰った資料の整理を始めている。

〈指定研究〉

『海外仏教研究』研究会報告
日時：昭和62年1月13日(火)
場所：研究所小会議室

San Tendai Godai san ki (『参天台五台山記』): Sung China through the Eyes of a Japanese Monk

Robert Borgen
University of Hawaii
Associate Professor of Japanese

During the T'ang and Sung dynasties, Japanese Buddhist monks periodically visited China. A few of them kept diaries, some of which are still preserved. The most famous of them, Ennin's *The Record of a Pilgrimage to China in Search of the Law*, is familiar to specialists throughout the world. At present, I am working on a study and translation of a second diary that is of comparable importance but received less scholarly attention: *San Tendai Godai san ki* (*The Record of a Pilgrimage to the T'ien-t'ai and Wu-t'ai Mountains*) by the monk Jōjin. In 1072 at the age of 62, Jōjin went to China accompanied by seven disciples. Although he himself remaind in China until his death, in 1073 he sent five of his disciples back to Japan. With them they took the many religious texts he had acquired in China—and the diary he kept during sixteen months of travel. In the following paragraphs, I would like to briefly introduce the diary, focusing on how it adds to our understanding of eleventh-century Chinese Buddhism.

Jōjin was a devout monk whose principal goal was to make a pilgrimage to two of China's holy mountains: T'ien-t'ai and Wu-t'ai. His diary offers a vivid description of his visits to both these religious centers. His account of T'ien-t'ai, where he spent nearly three months, provides details of contemporary religious practices. It reveals, for example, that Zen and Pure Land beliefs were then flourishing, and that

popular Taoist deities were already being worshiped at Buddhist monasteries. Unlike modern critics, however, Jōjin was not dismayed by the latter phenomenon, which he rightly equated with the worship of Sannō at Mt. Hiei. Jōjin also recorded legends concerning Chih-che, the founder of the T'ien-t'ai (Tendai) sect, and Han-shan (Kanzan), the famous Zen poet. Jōjin's visit to Wu-t'ai was much briefer, but there too he notes interesting details such as graffiti left by Chinese pilgrims. At Wu-t'ai he was rewarded by witnessing a five-colored cloud that he took to be a manifestation of the bodhisattva Mañjuśrī.

In his travels he visited many other religious centers and left colorful descriptions of monasteries and cults that have now vanished. His experiences in the capital demonstrate that Esoteric Buddhism was flourishing there. Jōjin also documents the close ties between church and state. He describes the government-sponsored sutra-translating and printing project in Kaifeng and the lavish official monasteries there. But he also transcribes a note given him by a Chinese monk asking him to request the emperor to eliminate age restrictions on the ordination of monks and grant monks freedom to travel. Jōjin portrays Sung Buddhism as a prospering religion with many believers and with both government support and regulation.

When Jōjin described the monasteries he visited, in addition to telling us about Sung religion, he also left us a record of eleventh-century Buddhist art and architecture. His account is particularly precious because much of what he portrayed was to be destroyed soon after when the Sung court lost north China. As a Buddhist, Jōjin did not dwell on purely aesthetic questions, but his was very much concerned with the types and arrangement of structures in each monastery and with iconographic details of the images he saw. Thus, he offers meticulous accounts of the architecture, layouts, and objects of worship to be found in Sung monasteries.

Although Jōjin enjoyed a long stay in the Sung capital of Kaifeng, he does not offer a well-rounded description of the city, since apparently he was not allowed to travel freely there. He did, however, get to visit the palace and he was given a tour of the important monasteries in the city. These are carefully described. For example, during his stay the region suffered a drought, and so he was summoned to the palace to participate in prayers for rain. This again demonstrates the close ties between the court and the Buddhist clergy. When the prayers proved effective, he and his fellow Chinese monks were allowed to wander about the palace grounds to see the sights. Accordingly, Jōjin is able to tell more about the palace and its customs than about urban life in the city of Kaifeng.

The Sung, it is said, was more active than most Chinese dynasties in seeking friendly diplomatic relations and profitable trade with its neighbors, in particular those which were not hostile. Jōjin's experiences in the Sung capital, and events with followed, illustrate these tendencies. Although Jōjin was only a monk, the Chinese treated him as a guest of state and used his visit as an opportunity to attempt to resume diplomatic relations with Japan, which the Japanese themselves had abandoned some two centuries earlier. Jōjin's interpreter, a Chinese merchant, was inspired by his example and resolved to become a monk. The former interpreter then accompanied Jōjin's disciples back to Japan, taking with them gifts and an official message from the Chinese court.

Jōjin's diary is a fascinating record of a Japanese monk's travels in Sung China. To be sure, the text is not without problems and disappointments. Some passages are ambiguous and a few are totally obscure. The years 1072–1073, when Jōjin was in China, are a particularly intriguing period in Chinese political and intellectual history. The great statesman Wang Anshih was in the midst of putting into effect his reform policies, and the issues that led to the rise of Neo-Confucianism were first being debated. Jōjin's concerns were not those of modern scholars, and he has virtually nothing to say about these matters. The disappointments in reading Jōjin's diary are small, however, when compared with the rewards. Since Jōjin himself was brought up in a sinified culture, he was a well-informed observer. His diary is a valuable source of information for both Buddhologists and sinologists that deserves more attention than it has received to date.

研究所報 第16号
発行 1987年3月30日
編集 大谷大学真宗総合研究所
〒603 京都市北区小山上総町